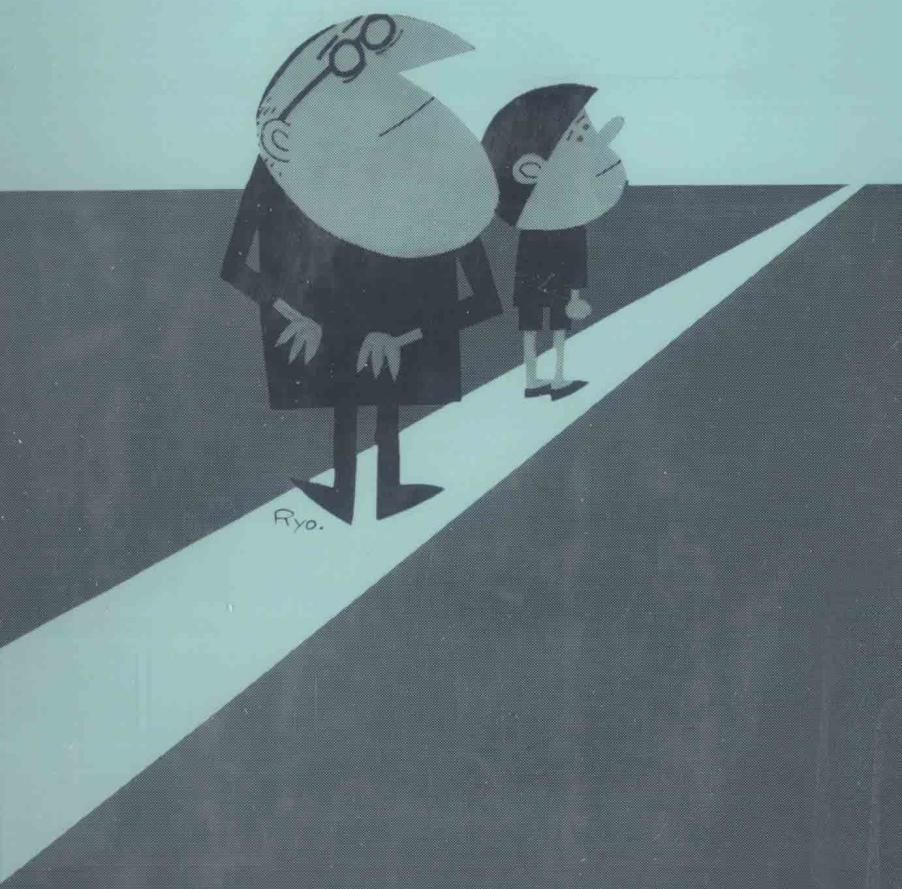
少年達よ、未来は

男性自身シリーズ

山口 瞳

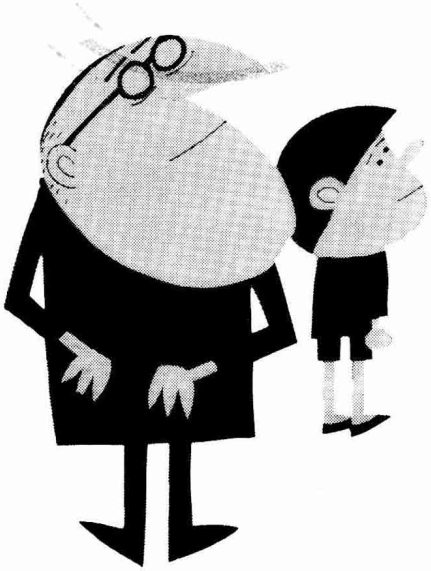


需要全本请访问 www.ertongbook.c

よ、未来は

山口 瞳

新潮社



少年達よ、未来は
男性自身シリーズ 6

昭和四十五年八月二十日 発行
昭和五十五年九月二十五日 七刷

定価 八八〇円

著者 山口瞳

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二 振替 東京一-五六
電話 業務部・東京 三六六-一一一一
編集部・東京 三六六-一一一一

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・植木製本株式会社
© Hitomi Yamaguchi 1970 Printed in Japan

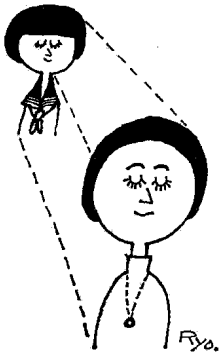
目

次



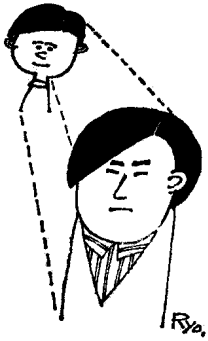
春 九
宿命論 一四
飯島 一九
山へ行く 二四
男の買物 二九
威張る奴 三四
競馬の本 三九
長生き 四四
善悪 四九
やれやれ二十年 五四
幸福 五九
リンゴの唄 六五
男と女 七〇

需要全本请访问 www.ertongbook.com



酒場考　七五
蛙の面　八〇
あおげば尊し　八五
来年の春　九〇
女　九五
別荘　一〇〇
軟式野球場　一〇五
艸心忌　一一〇
実力の一種　一一五
団地の花火　一二〇
虫の声　一二五
日記　一三〇
二等兵の思想　一三五

困ったわねえ　一四〇
性革命　一四五
秋の野に　一五〇
痩せる　一五六
三竦み　一六一
泣き虫　一六六
寝る一手　一七一
プロと人殺し㈠　一七六
プロと人殺し㈡　一八一
プロと人殺し㈢　一八六
プロと人殺し㈣　一九一
創作の秘密　一九六
病気見舞　二〇一



少年達よ、未来は　二〇六
ショック　二一一
いまの子供たち　二一六
禁酒考　二三一
禁煙について　二三六
欲張り　二三一
語感　二三六
会社の帰り　二四一
性教育　二四六
女の顔　二五一
いえの経済　二五六
棋士の顔　二六一
私の先生　二六六

装幀
カット

柳原良平

少年達よ、未来は

―男性自身シリーズ―

需要全本请访问 www.ertongbook.com

春

今年は二月と三月に雪が多くて、しまいには、うんざりするほどだった。降っているときはいいのだけれど、あとがいけない。雪かきをしなければならないし、庭が汚れてしまう。

私の住んでいる町は、東京の中心部より気温が低くて、十二月、一月、二月は、辛い思いをする。今年はそれが三月の半ばまで続いた。

去年の暮は、暖冬異変ということで暖かだった。それで、石油ストーブの油を売っている人が、零していた。二月の初めから三月の半ばまで、こんどは油屋がニコニコした。動作や顔つきでもそれがわかった。

二十日すぎから急に暖かくなった。二十七日などは暑いくらいだった。こんなふうに、いっぺんに春になってしまう年があるようだ。

はじめは桜が遅れるのではないかと思われていた。「この雪じゃしようがない」というようなことを言っていた。毎年の摘草の会も、いつにしたらいいか見当がつかなかった。それが、ぐるぐる変った。そんなふうに落着きのない気持にさせられるのも春だからだろう。

*　*

「春になって、仕事がやりやすくなったでしょう」

私は近所に住んでいる友人に言った。その友人は彫刻家である。漆をあつかったりするので、友人は裸にちかい恰好で仕事をすることがあるのを知っているからである。暖かくなったら仕事がはかどると思った。

「だめですね。春は駄目ですよ」

私は、びっくりした。友人は彫刻家としても作品の数のすくないほうの人である。名人気質のようなところがある。凝り性である。作品数のすくないということが何かの信念に裏打ちされているようなところがあった。

こういうひとを傍から見ていると、怠けているように見えないこともない。冬時分にも大きな仕事にとりくんでいる様子はなかった。やりかけの木彫が、そのままになっていた。私が驚いたのは、そのためである。冬も駄目、春も駄目では、仕事はいつになるのだろうか。

「どうして春はいけないんですか」

「春になると気が散って駄目なんですよ。地面に青いものが出てくるでしょう。そうすると、それは何だろうと思って、じっと見ているんですよ。なんの芽だろうかと思ってね。……それから、外のほうへ行ってみるんです。うちの庭のことは、だいたいわかっていますからね。ずっと、ひと廻りしてくるんです。青いものを見に行くんです。そうやっていると、まず、一日が終ってしまいますね」

実を言えば、私も同じことをやっているのである。友人の言うことはよくわかる。違っているのは、友人が植物のことにくわしくて、私が無知であるということだけである。私も見てばかりいる。

庭に一本の桜があったとする。

＊　　＊

それだけで、もう駄目なのだ。

釣りの好きな人は気が短いという。のんびりと釣糸を垂れているのではなくて、いまかいまかと思ってウキをにらんでいるのだそうだ。

植物の好きな人間にも同様のことが言えると思う。短気なのである。

一本の桜があるだけで心が騒いでしまう。心がざわざわする。のんびりと桜の枝を眺めているのではなくて、いまかいまかと蕾を睨みつけているのである。

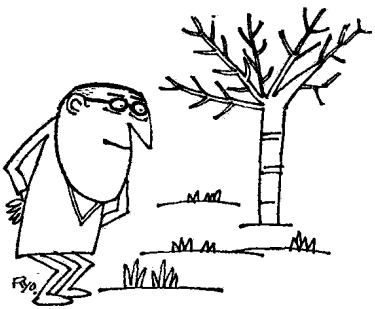
梅が終り、木蓮と辛夷が咲き、その他もろもろの花がいっせいに咲き、桜になる。とても落ちついてはいられない。

仕事をしていても、ついつい庭のほうを見てしまう。違った角度から花を見てみたいと思う。そうやって、ついつい庭へ出てしまう。ちょっとだけ土盛りをしてやったりする。

そうでなくても、私は、庭に植木を植える空間が残っていると落ちつかない。びっしり植えてしまわないと気が済まない。植木屋は、この庭は十年経つとよくなるといったようなことを言う。とてもそんなに待ってはいられない。

＊　　＊

庭に樹木があるということの有難さは、それによって一年の移



り変りがくっきりとわかることである。

樹木の効用はそれだけではない。

私は、日本の女性が中性化する大きなポイントは住宅問題にあると考えている。それが持論である。

家というのは、ある程度の広さがあり、ある程度の庭がないといけない。

室内を飾ったり、庭の手入れをしたりするのは女の役目である。そのほかに、来客のことがある。かりに団地住まいのひとを例にとると、そこでは女の役割がなくなっている、奪われてしまっているように思われる。そのうえに電気製品がある。テレビを見たり、昼寝をしたりするより仕方のないように生活を強いられているのではあるまいか。室内を飾ったり、模様変えをしようと思っても、どこもかしこも同じ間取りでは張りあいがないだろう。庭がないということも、若いうちはいいとして、だんだんに苦痛になってくると思う。そういうふうでは客を呼ぶのも鬱陶しくなると思う。

女性問題で、いろいろな論議がなされるが、最大の敵というか、根本問題となるべきものは、地代の値あがりにあると思う。とくに東京近郊の地代の高騰は、バカバカしくって話にもなんにもなりはしない。

私の同僚で、ガス風呂と電気洗濯機を拒否しつづけた男がいる。彼は、なかなかの愛妻家で、金ばなれもいいほうだった。しかるに、風呂は薪で沸かし、洗濯は盥だった。

「女はヒマになると駄目になってしまうんだ。おれは女房のためを思ってそうやっているんだ。第一、洗濯機で洗ったりしていると女らしくなくなってしまう」

彼の意見は極端であるけれど、当っていないこともないと思う。

六、七年前に、結婚問題を調べるために、何人かの上流階級といわれる家の夫人たちに面接したことがある。

私は、彼女たちが、いかにも健康そうで、ゆったりとしていて、快活であるのに驚いたことがある。五十歳ぐらいの人たちばかりだったが、まことに若々しい感じがした。そのとき私は、彼女たちは住宅問題で悩むことがないからだと思ったものである。それが当っているかどうかわからないが……。

*　　*

そうではあるけれど、わずかばかりの庭があり樹木があると、私は、反対に落ちつきを失ってしまう。それが春なのだろう。始終、地面をみつめるようになる。花を見あげるようになる。

もう一人の古くからの友人は、雨が降っているときは傘をさして植木に水をやるという。この気持もわからないことはない。

心が急くのである。気持がざわざわするのである。一刻も早く花が咲けばいいと思うし、すこしでも長く咲き続けてくれと願うようになる。

桜が咲き、それが散ってしまわないと、平静な気分になれない。福島や新潟あたりの花見も終ってしまわないと落ちつかない。

それが毎年のことであり、年々にその傾向が強くなる。

春は、どうも具合がわるい。

宿命論

私が、ある小説を書いたとする。

それが活字になり、読者の目にふれ、批評家が批評する。

批評家が酷評したとする。

やっつけ仕事である。いい気になっている。なんのためにこんな小説を書いたのか。文章がよくない。文法がデタラメである。志がひくい。作意が見えすいている。浅薄である。

ところが、その小説は、ずっと以前から依頼されていて、とうとう断わりきれなくて、いちばん悪い条件のときに書いてしまったものである。

連載がいくつかあって、執筆期間が三日しかとれない。ほかにも、単発の読切小説が重なっていて、テーマもストーリーも考える時間がなかった。まして作家的な燃焼なんてものもない。

おまけに、健康状態がわるくて、机にむかっているだけで心臓がドキドキする。第一日目はあきらめて眠ろうとしたが胸ぐるしくて眠れない。

二日目は、原稿用紙にむかってペンを取ると、とたんに言葉が逃げてしまう。ひとつの文章は、次に続く文章のためにあり、また、少し先の文章のためにある。ところが、書こうとすると、あらかじめ想定した後に続く文章を忘れてしまう。思いだせない。従って、一行も書けない。

需要全本请访问 www.ertongbook.com